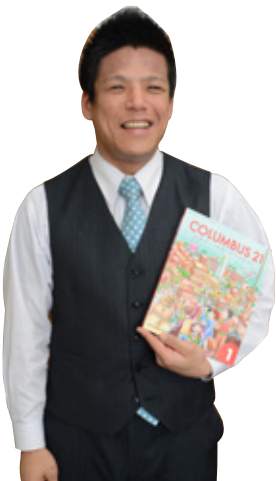


こう使う！

COLUMBUS 21

ENGLISH COURSE ⑤

中学校英語教科書『COLUMBUS 21』は、英語学習への意欲を高める工夫を随所に設けています。実際にその工夫を生かした実践をされている学校を取材し、先生のインタビュー(前半)と授業レポート(後半)の2部構成でご紹介します。



足立区立竹の塚中学校



1970年開校、東京都足立区北部にある公立中学校。各学年2〜3クラス、約200人の生徒が学ぶ。校舎の窓には、生徒のデザインにより誕生した学校のオリジナルキャラクター「竹坊」が描かれ、見る人を和ませている。英語の授業は、1クラスを二つに分けた少人数制で実施されており、2017年度から「5ラウンドシステム」を導入している。

松村祐輔先生

前 足立区立竹の塚中学校 英語科教諭
学生時代はスポーツ一筋。大学では心理学を専攻。卒業後は海外留学、飲食店経営などをしてきたが、一念発起し、通信教育で教員免許を取得。2011年の初任から竹の塚中学校に勤務し、19年4月から江戸川区立松江第五中学校に勤務。

タスクを作りやすい教科書

本校では2017年度から、教科書を1年の中で4〜5回繰り返して学習する「5ラウンドシステム」を導入しています(各ラウンドでの学習内容はp18を参照)。その中で、本文の理解度がある程度まで高まったラウンド4にタスク(特定の目的を達成するために行わせる課題)を取り入れ、「とにかく使わせる」ことを心掛けています。

『COLUMBUS 21』の特徴として、全体を通した本文のストーリーの魅力がよく挙げられますが、もう一つの大きな特徴として、**タスク設定のしやすさもあります**。言語活動のコーナーである「Try It!」や「You Can Do It!」など、教科書そのものに数多くのタスクが設定されているというだけではありません。これらのコー

ナーをアレンジするなどして、オリジナルのタスクを設定しようとしたとき、本文のストーリーが身近な日常で繰り返されているため、生徒が「自分ごと」として挑戦できるタスクを作りやすいのです。

タスクに集中して取り組ませるには、その英語の表現を使う「必然性」をつくるのが大切です。そのためには、現実に近い場面を設定することが重要になります。今回の授業では、「相手に朝の日課とその時間をたずねた後、待ち合わせの場所と時間を決める」というタスクを設定しました(p18-19の授業も参照)。これは、Unit 6の本文に朝の行動についてのストーリーがあり(※1)、登場人物が日常の会話として、時刻をたずねたり、答えたりしているからこそ、生徒たちが自然にタスクに入り込めるわけです。

ラウンド制がタスクの効果を高める

また、「5ラウンドシステム」が、タスクの効果をよりいっそう高めています。ラウンド3までに豊富な音読を積ませ、タスクに取り組ませるのですが、「この表現、教科書では何て言っていた？」と生徒たちに問いかけながら、進めていきます。これまでに繰り返し触れてきた**英語表現を、思い出しながら実際に使ってみるという経験**をすることで、「定着」に結び付けることができます。ここで、生徒たちは「わかる」「使える」という達成感を得られるのです。

実際、タスク活動中の生徒たちの会話では、「You're very late!」と本文の表現をまねしていたり、「あのとき、"It's almost eight o'clock."って言っていたよね？」などと表現を確認し合っていたりする様子が見られます。

以前まで、ラウンド4では、レシテーション(本文の暗唱)だけに取り組ませることが多かったのですが、タスクを取り入れるようになったことで、いい変化が見られるようになりました。



※1『COLUMBUS 21』1 p74
Unit 6の本文。何気ない朝の日常会話の中に、時刻の表現などが出てくる。

タスクは自然なコミュニケーションに近いので、相手に理解してもらう工夫が必要になります。そこで、生徒たちは自分が伝えたいことと実際に表現できることとのギャップに気づき、自然と文法を意識するようになりました。

2017年度から導入した5ラウンドシステムですが、私一人の力ではなく、ほかの先生方との連携のおかげで、非常に上手く機能しています。同僚の先生方全員が必要性を共有し、チーム一丸となって生徒のことを考え抜くからこそ、改善点も生まれるのだと思います。

小中接続で求められる「使う」視点

『COLUMBUS 21』は、5ラウンドシステムとの親和性が非常に高いと感じています。**ストーリー性に優れているのはもちろん、まとまった量を音読させられるのがいいですね**。

今後は、小学校で英語によるコミュニケーションを中心に、豊かなインプットを経験してきた児童が中学校に進学してきます。そのとき大切になるのは、**PracticeではなくUseの視点をもって授業を進めること**ではないでしょうか。小中接続を考えたときに、中学校に入ったらいきなり文法……となると、せっかく小学校で親しんできた英語に、抵抗感を覚えてしまう生徒もいるかもしれません。

これからの中学校の英語教育では、まずはタスクに取り組ませてみて、できなかった項目をドリル形式で練習させる、という手法がよいのではないのでしょうか。そう考えると、タスクを作りやすい『COLUMBUS 21』は、これからの時代に合った教科書といえると思います。

松村先生の授業は次のページでご紹介!

こう使う!
COLUMBUS 21
ENGLISH COURSE

松村先生の授業を レポート!

1年生少人数クラス(生徒数:11名)

学習内容: Unit 6 タスク(ラウンド4)

本時の目標: Unit 6の表現を使ってやり取りする



“How are you?”

教室に集まってくる生徒たちに、松村先生が声をかけた。

“I’m hungry.”

“Hungry? Why?”

“Because I ate only *ochazuke*.”……

授業前から、英語での会話が自然に繰り広げられている。チャイムが鳴ったときには、生徒はすでに英語モード。あいさつ、日付、天気の確認と、リズムカルにやり取りが展開していく。続いて、翌日に控えた英単語テストの学習に入る。ペアで交互に単語を読み、全員で読みを確認した後、各自で書き取り練習という流れだ。生徒たちはスラスラと鉛筆を動かしていた。

[1st Try] Planning タイム 質問のしかた、答え方を考える

ここからいよいよ本時の活動へ。松村先生が“Where did you go in December?”と問いかけながら、ワークシートを配付した。そこには、昨年12月に校外学習で行った体験型英語学習施設に再び行くことになったので、必要な情報をお互いに聞きながら、待ち合わせの場所と時間を決めよう、というタスクが書かれていた。

Step1では、まず起床、洗顔、朝食、歯ブラシ、着替えといった朝の日課について、それぞれの行動を行う時間を記入した。次に、松村先生は1分間の「Planningタイム」を設定。会話に入る前に、質問のしかたや答え方を考える時

今日の
授業はココ!

●Unit 6 Breakfast Time

本文の内容: アメリカ出身のティナの家では、朝から元気な声が聞こえてくる。でも、なかなかティナが起きてこなくて……。

ラウンド	時間数(目安)	内容
1	1	リスニングによる内容理解: 絵から読み取れる情報をヒントに聞き取る
2	1	音と文字の一致: 順不同に並べた絵カードの順を正す
3	3~5	音読: ①単語確認と内容理解 ②音読の徹底 ③Read and look up ④グラマーハント(※1)
4	1~2	レシテーション(暗唱)+タスク ★
5	1~2	リテリング(Story Retelling): 特定の登場人物の視点から伝える

※1 該当する文法事項をゲーム感覚で本文から探す活動。

間だ。生徒の会話に耳をすますと、「洗顔は、wash face?」「歯ブラシって何だっけ?」「Tooth ブラシ?」などの声が聞こえてきた。その後、松村先生は「OK。とりあえずやってみよう!」とタイマーをセット。生徒たちは自分なりに考えた表現を使い、情報を聞き出していく。

[1st Try] Sharing タイム 使った英語表現をシェアする

2分後、松村先生は日本語で声をかけた。

先生 どんな英語が出たかな?

生徒1 What time do you ~? とか。

先生 いいね。ほかには?

生徒2 How about you?

先生 OK。「起きた」とかは言えた?

生徒3 Get up!

先生 じゃあ、「顔を洗う」は何て言う?

こんな要領で確認しながら、生徒から出てきた表現を次々と板書していく。

続くStep2では、待ち合わせ場所と時間を決める。Step1と同様、まずは2分間、各ペアで自分たちなりに会話してみて、使った表現をクラスにシェア。松村先生がその表現を板書、という流れを繰り返した。それを終わると、各自ワークシートに、1st Tryでの会話を振り返り、CAN-DOの4段階で自己評価を行った。



松村先生に見守られながら、ペアで会話に取り組む生徒たち。



これまでのラウンドで触れた表現を思い出しながら、手探りで言葉を紡いでいく。

[2nd Try] Reflection タイム 表現を確認しながら再挑戦

ここでペアを変え、1st Tryと同じように、Step1, 2の順に会話に挑戦していく。松村先生は、今度はタイマーを5分にセット。朝の日課の時間をたずね合い、待ち合わせ場所と時間を決めるところまでを一気にやってしまうよう指示した。2回目の挑戦とあって、教室の至るところから、滑らかで自然な会話が聞こえてくる。「What time do you ……えっと(黒板を見る) ……brush your teeth?」と、表現を忘れた生徒は、黒板で確認しながら練習していた。松村先生は机間指導しながら、生徒たちが英語で言えずに日本語で話していた表現をピックアップし、黒板に書き出していた。

タイマーが鳴ったところで、生徒たちは再び会話の出来をワークシートにCAN-DOの4段階評価で記入し、学習成果を確認。その間に松村先生は、黒板に書いてあった「だらしのない」「店、開いてるの?」といった表現を英語でどう言うか紹介した。この「Reflectionタイム」が、生徒たちの表現の幅を増やすようだ。ワークシートをのぞいてみると、この日使った英語表現や単語がたくさんメモされていた。終業を告げるチャイムが鳴ってからも、黒板を熱心に書き写す生徒たちの様子が見られた。